

## 捕虜

小郡市 松本 嘉須雄

昭和20年11月24日、齊州島山地港で我々は米軍の上陸用舟艇に詰め込まれた。1000人位はいたろう。案外早い「捕虜送還」だった。この島では1年くらい例の穴掘りばかりやっていたのだが、将兵の大部分は4～5年の戦闘歴を持つ「強者」、つまり、この度の大戦初期、連勝を続けた連中だから、どうも捕虜というその時の立場がピンと来ない感じは否めなかった。

「一押ししたら、ひっくり返りそうな子供ばかりじゃないか」

初めて見る米兵の感想をそういう兵隊もいた。

舟艇の乗組員の他には、あまり警戒兵の数も多くなく、広場での私物検査から順序よく乗り込んだが、何しろ狭い。乗り込んだもののじっとしていないので、そろそろ空気がおかしくなり始めた。お互い同志よりも、珍しい日本兵を相手の米兵の何かいっていることがわからないのだ。

実は乗船前、英語の解るものが少なくて閉口している。大抵のところでは良いからそういう兵隊でも将校でもいたら出してくれという通達はあったが、誰も出ない。私にしたところが、暫く残ってくれ等と言われたら困るので、知らぬ顔をしていたのである。

しかし、甲板が少々騒がしくなってきたので、主計軍曹を無理に押し出したところが、直ちに、「駄目ですよ、彼等のいっているのは英語じゃないんだ」と怒ったようにして帰ってきた。ほっとくわけにもいかず、しょうがないので私が出ていったが、結果は同じ。私はまだ大尉の襟章を着けていたから、相手の態度がいくらか穏やかではあっても、解らぬことは同じ。とうとう私はゆっくり言った、「我々は英語しかできないのだ」

相手の米兵はちょっと妙な顔をしたが、私を上甲板の士官室に連れていったのである。

そこには米軍の輸送警戒兵の指揮官である若い中尉がいて、私に一応の敬意を表して「何事がおこったのか」と聞いてきた。私は「貴官の兵隊の言葉がわからなくて困っている。我等はキングスイングリッシュしか解し得ないのだ」

そうしたら彼は急に親しみを増したようにしゃべり出した。こちらは彼の言っていることが半分位しかわからないが、同年輩の学生みみたいな楽な気分で相手になった。

彼も「2年前にエール大学を出たばかりで、この先何年軍隊におらねばならぬのかわからぬ」と嘆く。

私は、「私の英語の先生は、ケンブリッジのウエークフィールドといったが、やはりどこか戦争に出ているのではないかと思う」等と話をするうちに、煙草からウイスキーまで出るようになってしまった。

二人共、私がここに呼ばれた要件等忘れてしまっていた。要するに、船内の清掃と、錆落と

しの使役を出してくれ、機雷をよけて航海せよならぬので、2泊、どうかすると船内に3泊せねばならぬかもしれないということであった。甲板でもめていたのは、飲料水と雑用水との標示を、日本文で書いて張り付けてくれという、簡単なことであった。

ところが簡単でないのは、「捕虜」の側だったのである。

私はちょっと良い気分になって、ムツとする我が「捕虜」の指揮官少佐殿のところに降りて行って、その指示を伝えようとした。ところが途中でその副官に会った。彼は言う。「俺が伝えておく。明日からそうする。君がそんな赤い顔を少佐の前に出したら、ぶんなぐられるぞ。彼らは負けたつもりは無いんだからな」

なるほど、これは大切なことだ、「私は副官によろしく頼む」といっておいた。

ところが兵隊はいい気なもので、あちこちで、友好交歓が始まっている。米兵は煙草やチョコレートを手帳の上に並べて、物々交換である。久しぶりの甘い菓子や、香りの良い「洋もく」にありついてニコニコしている老兵達に別に問題はあるまい。また、その監督が私の権限でもないと思っていた。

ところが、一人の米兵が船倉の我々の中に大声でわめき込んできた。手に腕時計を振り回している。私がなだめなだめ、ようやく聞き出したことは、沢山の煙草と交換したこの時計が、すぐ動かなくなったというのである。煙草を貰った兵隊が出てくればよいが、この中から捜し出すのは無理だ。

この時計は、日本の有名なメーカーのものであり、上陸のとき修理屋に出せば立派に直るといって、持ち合わせた小額の日本紙幣を渡して、納得してもらった。

その晩は、甲板でアメリカ映画があり、許可されたかどうか私は知らないが、日本兵も見せてもらって、喜んでた。

翌日の午後である。例の副官が来て、

「少佐が、いつ日本に着くのか聞いて来いといっている。頼むよ」

という。大体、数時間で着くべきところだからおかしい。彼らは磁石と時計を持っていて、どうも南方へ行っているようだ、不安がっているという。

「その説明は真っ先にしたじゃないか。大体私は通訳を命じられた訳ではない」

と少し意地悪く言ってやった。彼は、「いや、俺も一緒に行く」というので、2人でフレデリック中尉を尋ねた。

「今日の夕方には、五島が見えるかも知れない。君たちは家に帰れていいなあ」と羨ましがっている。

船倉に入る前ちょっと、と副官が言う。

「実は、俺は君を護衛しているんだ。」

と、不穏なことを言う。

敗戦の報が司令部に届いたとき、前述のように負けたという意識がない、というよりそう思いたくない一部の動きがあったのは、この小さな島でも同じであった。一人の現役（士官学校

出身) 将校は、割腹して果てたという。その所属部隊が、この怒りっぽい少佐の部隊であるとしたら・・・

私と同じ幹部候補生出身(学生上がり)の副官と二人、デッキによってしばらくの間黙って水平線を眺めていた。少佐の回りには、自殺した将校の同僚がおり、米軍の将校といかにも調子よく付き合っている私の様子が、苦々しく見えたのも当然であろう。

この日の夕方、中尉から呼出しがあって行くと、水平線の彼方に霞の一线みたいな五島を指し示した。私が少佐に報告に行くのをためらっているうちに、兵隊達がもう甲板に上がって騒ぎ始めた。